

令和7年度 第3学年入学者選抜学力試験問題

一 般 科 目

国 語

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
- 2 問題用紙は10ページ、解答用紙は2ページあります。試験開始の合図があつてから確かめなさい。
- 3 監督者の指示に従い、解答用紙の各ページに受験番号を算用数字で記入しなさい。氏名を書いてはいけません。
- 4 文字などの印刷に不鮮明なところがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。ただし、「採点欄」「得点欄」に記入してはいけません。
- 6 問題用紙の余白は下書きとして利用してかまいません。
- 7 試験終了後、配付された問題用紙は持ち帰りなさい。

問題用紙（国語）

I 次の文章は、村田純一「科学の創造性と倫理―ペーコンの科学の行方」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文中の語句の右肩の*は、文章の最後にある（注）の記号である。

「原爆の父」と呼ばれるロバート・オッペンハイマーは、原爆実験が成功したときに「物理学者は罪を知ってしまった」と述べたといわれている。この場合には、核物理学というもつとも基礎的な科学にもとづく知識が、技術開発や第二次大戦下の政治状況など、さまざまな媒介要因を通してではあるが、原子爆弾という巨大な破壊力をもつ兵器を生み出すうえで決定的な役割を果たすことになった。ここでこの事例に大きな倫理的意味をもたせているのは、原爆の破壊力である。この大きな力が、科学者の活動に対して、銃のようなほかの兵器の開発の場合とは違って、兵器開発自体は目的から独立して価値中立的にとどまる、ということのを許さないような意味をもたせている。

知識の探究を目的とする科学がなぜこのような力をもつことができるのだろうか。

この点を考えるために、以下では、時代をさかのぼって、近代科学の特徴を「知は力なり」という言葉で表現した*フランシス・ペーコンの科学観、学問観を取り上げて^アケントウすることにしたい。

ペーコンは、古代ギリシャで最も高く評価されていた学問的な知識は子どももの知識であり、何も生むことができないと批判し、a、職人たちが蓄えてきた有用な知識の重要性を強調している。しかし

他方で、伝統的な職人の知識は、たしかに役には立つが、なぜ役立つのが明らかになっていない点で不十分だとみなす。職人たちは経験にもとづいて有用な方法を身につけてはいるが、それらは個々ばらばらな盲目的な知識に^{とど}まっておき、普遍的に利用可能になっていないというわけである。^Aこの点を改善するための方法が「光をもたらす実験」であり、この実験については繰り返し以下のように述べられる。「経験を正しく進め、それによって新しい成果をあげるためには、神の知恵とその定めた順序をそのまま^イモハンとしなければならない。ところで、神は創造の第一日にただ光だけをつくって、それにまる一日をあて、その日には何も物質的なものをつくらなかった。それと同じように、どんな種類の経験からも、まず第一に、原因と真の一般的命題との発見を誘い出し、そして成果をもたらす実験を求めずに、光をもたらす実験を求めなければならない」

ペーコンにとつて「光をもたらす実験」によって取り出されるのは、最初から自然を利用する作業の規則となるような法則性であり、実践と切り離されたたんなる理論的知識と考えられているわけではない。

b ここでは、科学と技術のあいだに応用と呼ばれる仕方^で結びつけられる必要のあるギャップが存在しているように思われる。別の箇所では、「作業においてもつとも有用な指示は認識においてもつとも真なる指示である」という言い方までしている。したがって、ペーコンの自然哲学、つまり自然科学観のなかには、なぜ自然の探究に価値があるのか、あるいはそもそも、科学は自然に関して知るに値する知識をもたらすのだろうか、といった疑問の入る余地は最初からないようにできている。

ある出来事が生じた場合、その原因を特定するには、多様な要因のなかから、たんなる付随現象や偶然的な相関的出来事を排除して、実際に働いている要因を取り出す必要がある。そのためには、人工的な状

問題用紙（国語）

況を作り上げて、条件を制御しながら実験を繰り返す必要があるだろう。「光をもたらす実験」を実現するために、^{*}アリストテレスのように自然の「^{*}観想」に留まっていたのでは不十分であり、むしろ、自然を操作し人工的な状況を作り上げる製作活動が不可欠だということになる。

新しい自然哲学の成立、つまり、^B近代科学の成立の特徴をベーコン的観点からとらえることは、すでにさまざまな論者によって強調されてきた。また、近代科学の成立の過程である科学革命を象徴する出来事として^{*}ガリレイの落下実験や望遠鏡による天体観察などが取り上げられる場合、そこで^{みいだ}見出されるのは、人工的に作られた実験装置や望遠鏡のような観測器具を用いることによってはじめて可能になった人工的現象であり、そして、まさに人工的に可能になった現象こそが自然本来のあり方を示しているとみなされるようになった点が注目されてきた。こうした点で、近代科学においては、自然と人工の関係について、アリストテレスの見方の一種の逆転が生じていると考えることもできる。

^Cc 注意深く作られたもの、
こそが真の自然の姿、真の自然の事実なのだ、というわけである。

しかしながら、ここには明らかに一種の逆説が生じているようにみえる。というのも、真の自然的な事実は、それが作られていることによって明らかになる、というわけであるから、これはすなわち、作られたものはまさに作られているがゆえに作られていないあり方が示される、ということの意味しているはずだからである。

ここで注目すべき事柄として、^C第一には、逆説的に見えた実験科学のあり方が広まることによって、ひとつの新たな実践活動の型が成立することになった点があげられる。つまり、（客観的自然についての）新たな知識を獲得するための実践活動という、いわば理論と実践が交差したところに成立する活動が独自の位置を占めることになったからである。少なくとも、この活動は知識を目指した活動であり、技術のようにただちに何らかの社会的な目的を実現するための活動とはみなされない。つまり、役に立つかどうかとは切り離された仕方、自然のあり方を自然に介入することによって製作する、という実践が、ひとつの意味ある位置を獲得することになったのである。なぜそれが意味あるものとみなされるようになったかといえ、^{*}実験がゼロサムゲームではなく、新たな知識をもたらすという創造性をもつと考えられたからである。

d、この活動は直接的な「成果をもたらす実験」ではなく、あくまでも「光をもたらす実験」に従事するといいうるかぎりでは、社会に役立つ技術とは一線を^ウ力クする活動という意味をもつことになる。歴史的にも、知識自体、真理自体を目指す実践活動に固有の価値が認められる時期が登場することになった。

この点に関してもベーコンの思想のもつ射程は驚くべきものだった。すでに繰り返してきたように、この「光をもたらす実験」は直接的な成果を求めない活動であるにもかかわらず、というより、まさに直接的成果から距離をとることによって、かえって、得られた知識は体系化され、普遍化される可能性を得し、個別的、盲目的な伝統的技術とは違って、積み重ねによる進歩が可能となり、より大きな力を人間にもたらすことになることが期待される。実際、ベーコンは、未完に終わった『ニュー・アトランティス』

問題用紙（国語）

という一種のユートピア物語のなかで、創造的な自然科学が社会のなかで制度化され、社会の進歩の推進力となっているような社会を描いたのである。

現代では、科学技術の振興を社会の発展の基礎にすえるという考え方はほとんどあらゆる社会に受け入れられるようになっていく。

e 同時に、科学技術のもたらす成果が、地球環境の変化を及ぼすまでの力をもつことになったり、ゲノム編集やクローン人間の製作のように人間の尊厳をも脅かすように思われる事態を生じさせたりするまでになってきた。こうした解決困難な問題を引き起こす力をもつに至った遠因もまた、ベーコンの考え方のなかにヒソ^エんでいたと考えられる。

ベーコンは『知識の賛美』では次のように述べている。「人間の尊厳は疑いもなく知識のうちに力^オくれている。……今、われわれは意見において自然を支配しているが、必然においては自然の奴隷である。しかし、発見において自然のなかに導かれるならば、行動において自然に命令することができであろう」。ここでは「自然の奴隷」であるという言い方さえしているが、これはまさに神の奴隷である、ということの言い換えにほかならないのであり、このことがベーコンに科学技術にもとづく進歩という楽観的な見方を可能にしたのである。こうして科学的知識と科学的活動の意味と価値をめぐる問いは最初から排除されることになる。科学によって知るに値することは何なのか、はたして科学に限界はないのか、といった問いの占める位置はないのである。

現代のわたしたちは、ベーコンの場合のように神による保証と保護を与えられてはいないし、神によって作られた自然が人間の活動を制限し導いてくれる保証もない。こうしてわたしたちは、ベーコンの見出した逆説的な科学のあり方の帰結を自ら引き受けなければならなくなっているのである。

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

（注） ○ロバート・オツペンハイマーⅡ一九〇四～一九六七。アメリカの理論物理学者。第二次大戦中、ロス・アラモス研究所所長として原子爆弾の完成を指導した。 ○フランシス・ベーコンⅡ一五六一～一六二六。イギリスの政治家・哲学者。 ○アリストテレスⅡ前三八四～前三二二。古代ギリシャの哲学者。 ○「観想」Ⅱ世界に存在する事物をそのあるがままの姿で眺めること。事物の真相に到達するために、経験や実践を介さずに思惟^しすること。 ○科学革命Ⅱ一七世紀の西欧で古典力学を中心とする近代科学が生じた歴史的事実を指す。 ○ガリレイⅡ一五六四～一六四二。イタリアの天文学者・物理学者・哲学者。 ○ゼロサムゲームⅡ参加者それぞれの選択する行動が何であれ、各参加者の得失点の総和がゼロになるゲーム。ここでは、「自然のあり方を自然に介入することによって製作する」実験は、結局世界に何も付け加えないということをいう。

問題用紙（国語）

問一 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ（楷書^{かいしょ}でていねいに書くこと）。

問二 空欄

a

く

e

に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ

選び、番号で答えよ（一つの語は一つの箇所にしか入らない）。

- 1 したがって 2 しかし 3 むしろ 4 つまり 5 ただし

問三 傍線部A「この点を改善するための方法が『光をもたらす実験』であるとはどういうことか。その説明として適当でないものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 職人たちが蓄えてきた有用な知識を誰もが使えるようにするためには、彼らの経験の中から実際に成果をもたらす要因を実験により取り出さなければならず、それが神の創造した自然の法則性であるということ。
- 2 伝統的な職人の知識がなぜ役に立つのかを明らかにするためには、役に立つ成果をあげるための実験ではなくて、神が創造の第一目に作った光、すなわち自然の法則性を見い出す実験をしなければならぬということ。
- 3 職人たちの個々ばらばらな知識を普遍的に利用可能にするためには、職人たちが自然を利用する作業の規則となるような、神の定めた自然の法則性による新しい成果を、実験によつて作り出さなくてはならないということ。
- 4 職人たちが経験的に身につけてきた有用な方法がどのようなものであつても、その経験の中から成果をもたらす原因とそこに働く神の定めた自然の法則性を取り出す実験によつて、その方法は普遍的なものになるということ。
- 5 職人たちの経験にもとづく方法を正しく用いて新しい成果をあげるためには、直接その成果をもたらす実験ではなく、その方法の中にある神の光、つまり自然の法則性を明らかにする実験が必要だということ。

問四 傍線部B「近代科学の成立の特徴をベーコン的観点からとらえる」と、その「特徴」はどういうところにあるのか。それを述べた四〇字以上四五字以内（句読点・括弧類も字数に数える）の部分を本文中からそのまま抜き出して答えよ。

問五 傍線部C「逆説的に見えた実験科学のあり方が広まることによって、ひとつの新たな実践活動の型が成立することになった」のはなぜか。本文中の語句を用いて八〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で説明せよ。

問題用紙（国語）

問六 次の1～5について、本文の内容に合致するものには○、合致しないものには×をつけよ。

- 1 「作業においてもつとも有用な指示は認識においてもつとも真なる指示である」とあるように、「光をもたらす実験」はペーコンにとつては職人たちの作業に役立つような自然の法則性を発見するための方法であった。だから、自然の探究は初めから価値あるものとされ、自然に関して知るに値する知識をもたらすものとされていた。
- 2 近代科学においては、自然と人工との関係について、作られたものはまさに作られているがゆえに作られていないあり方が示される、という逆説が生じているように見える。これは、作りあげられた状況の中で製作された自然のあり方はあくまでも人工的に作られた自然であり、真の自然の姿を示しているわけではないと考えられてきたことを意味している。
- 3 「光をもたらす実験」が直接的成果から距離をとることによって、得られた知識は体系化され普遍化される可能性を獲得し、積み重ねによる進歩が可能となった。しかし、「光をもたらす実験」は技術のようにただちに何らかの社会的な目的を実現するための活動ではないから、社会に役立つ力を人間にもたらすことはできなかった。
- 4 ペーコンの考え方にもとづけば、人間は神の奴隷であるから、たとえ行動において自然に命令することができ力を手に入れたとしても、すべての科学的知識と科学的活動は神の保証と保護のもとにある。だから、人間は自然科学によつて手に入れた力を発揮して社会の進歩を目指していけばよく、科学の意味や価値をめぐる問いは最初から排除されている。
- 5 原爆の破壊力をはじめとして、人間の生存や尊厳を脅かす巨大な力を科学技術は持つようになった。そのことが、科学者の活動に対して、科学や技術の探究それ自体は目的から独立して価値中立的にとどまる、ということを許さないような意味を持たせている。現代の私たちは、科学や技術の探究の意味や価値について問うていかなければならない。

（以下 余白）

問題用紙（国語）

Ⅱ

次の文章は、田尻祐一郎『江戸の思想史 人物・方法・連環』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文中の〈白文〉は出題者が挿入したものである。また、語句の右肩の*は、文章の最後にある（注）の記号である。

佐久間象山（一八一―「文化八」年―一八六四〔元治元〕年）は、信州の松代藩士であるが、藩主である真田幸貫が幕府の海防掛に任命されたのを機に、自らも江川坦庵について高島流の砲術を習得し、さらにオランダ語を学んで西洋の砲術を体得しようとした。佐藤一斎の門人であり、勝海舟の妹を妻に迎えている。吉田松陰・坂本龍馬らに西洋科学技術の研究の必要性を説き、開国と公武合体を主張したが、攘夷派により暗殺されてしまった。

松陰に海外密航を勧めた咎で獄にあつた時の感慨を書き連ねた『省儚録』には、

予、年二十以後は、すなわち匹夫も一国に繋ることあるを知る。三十以後は、すなわち天下に繋ることあるを知る。四十以後は、すなわち五世界に繋ることあるを知る。

とあつて、藩から日本全体へ、日本から世界全体へという、象山の世界認識の広がり振り返った言葉として象徴的である。二十歳以前とはいえ自分が藩に繋がっていると知らないはずはないから、その意味は、藩が一つの政治力学（ダイナミズム）をもつ組織体として動いていて、自分もその中にあることを知り、やがて日本もまた一つの政治運動体であつて、そして世界全体もそうであること、その中で自分の為すべきこと、自分の学問や出処進退を考えるべきを思い知つたというのである。

象山は、朱子学の「格物窮理」の精神を生かして、西洋の進んだ知識や技術を積極的に学ぼうとした。

A 西洋はなぜ知識や技術において進歩したのか、こう象山は問題を投げかけて、

詳証 術は万学の基本なり。泰西（西洋）この術を發明し、兵略もまた大いに進み、自然として往時と別なり。いわゆる下学して上達するなり。（同）

と述べている。「詳証術」は数学、「下学して上達する」は『論語』に見える孔子の語。西洋の学問が数理的な合理性を基礎とすることで、有用の技術として応用されていることを象山は言っている。

象山は、こうも言う。

君子に五の樂あり。しこうして富貴は与からず。〔中略〕聖学を講明し、心に大道を識り、時に随い義に安んじ、險に処ること夷のごときは、三の樂なり。西人が理屈を啓くの後を生れて、古の聖賢のいまだ嘗て識らざるところの理（白文）所未嘗識之理を知るは、四の樂なり。東洋道德、西洋芸術、精粗遺さず、表裏兼該し、因りてもつて民物を沢し（人々に恩恵を与え）、国恩に報ゆるは、五の樂なり。（『省儚録』）

「東洋道德、西洋芸術」とある「芸術」は、自然科学の知識や技術のことである。これは、東洋は道德に優れ、西洋は科学技術にヒイでているというだけではなく、その双方を合体させて、「古の聖賢」が想像もしなかった高い文明に到達しようという自負の言葉である。

象山より二歳年長の横井小楠（一八〇九〔文化六〕年―一八六九〔明治二〕年）は、熊本藩士で朱子学者

問題用紙（国語）

であるが、^{*}経世家として著名であり、福井藩の招聘により松平春嶽のもとで藩政改革にあたった。小楠も象山と同じく、攘夷派によって暗殺された。

小楠は、^B「己に思うの誠なければ、後世の如く幾千巻の書を読み候ても皆帳面しらべになるものに候」（『沼山対話』）というように、詰め込み式の学問を^Eケイベツした。ここには、自己の内面に切実な学問を求めた朝鮮王朝の朱子学者、^{*}李退溪を尊敬してやまない熊本の朱子学の伝統が流れている。

同時にまた小楠は、事物の「理」が真に自己のものとなっていれば、それを自在に「活用」できなければならないと説いた。その「活用」として、象山と同じように小楠も、西洋の科学技術の発展に強い関心を払い、「火輪船」（蒸気船）、「蒸気車」、「伝信器」、「水車木綿」（水力紡績機）などの発達を称えている。^{*}さらに「近來又紅海の海峡を掘りぬき海路とする等のこと誠に莫大の利なり」とし、それら全体を「聖人の作用を得たるもの」と評価した。スエズ運河の開鑿が、朱子学の観点から称賛されているのである。また、こうも言う。

イギリスはイギリスの割拠見、ロシヤはロシヤの割拠見にて、各の一国一国の議論主張致候故、追々^{*}惨怛の戦争引起し候。〔中略〕全体割拠見と申す者^b免れ^cがたきものにて、後世は小にして一官一職の割拠見、大にしては国々の割拠見、皆免れざることに候。真実公平の心にて天理を法り此割拠見を^d抜け候は、近世にてはアメリカワシントン一人なるべし。ワシントンのことは諸書に見え候通、国を賢に譲り^{*}宇内の戦争を息^eるなどの三個条の国是を立て、言行相違なく是を事実^fに踐行い、一つも指摘（批判）すべきことは無之候。

「割拠見」は、自分たちの利害損得だけで物事を見る思考法。驚くべきことに小楠は、「至公至平の天理」の観点から、将来オランダがジャワ島を、イギリスがインドを返還することがありうるだろうかとも論じて、しかし現実には各国がそれぞれの「割拠見」にシ^ウバ^エられて^エいるから、それは望めないと予測している。しかしワシントンだけは、「真実公平の心」をもって、「割拠見」を突破したと高く評価する。ワシントンの力^エカ^エげた「三個条の国是」は、世襲をしないこと、戦争を紛争解決の手段としないことに加えて、知識を世界に求めて政治や教育、福利厚生に活用することだと小楠は説明する。そして小楠は、ワシントンの政治こそが、堯・舜^{ぎやうしゆん}ら古代中国の聖人の理想に^カ適^カうものだと考えた。象山の目には、「西洋芸術」までしか入らなかつたが、小楠は^Cそれ以上のものを見ている。

小楠は、開国・鎖国の議論に対して、どのような見解をもっていたのだろうか。

凡^{およそ}我国の外夷に処するの国是たるや、有道の国は通信を許し、無道の国は拒絶するの二ツ也。^e有^あ道無道を分たず一切拒絶するは、天地公共の実理に暗^{くら}して、遂に信義を万国に失うに至るもの必然の理也。（「夷虜応接大意」）

小楠は、「有道の国」とは国交を開き、「無道の国」とは関係をもたないことを説いている。国際関係を単に力と力、あるいは先進と後進の関係として捉えるのではなく、国家間にも「天地公共の実理」が貫かれなければならないし、この「天地公共の実理」に反する行為は、結果として「信義を万国に失う」こと

問題用紙（国語）

で国家に不利益を招き、時には国家を危機に陥れるというのである。こうして江戸の思想史において初めて、国家と国家の繋がりが何に拠るべきかが原理的に問い直された。

小楠は、確かに国益を考えるのであるが、それが国家を超える価値としての「天地公共の実理」によって支えられていることが重要である。^{*}春台がトビラを開いて、江戸時代後期、そこから多様に展開した経世論や国家論は、国益の追求が自己目的とされる傾向が強かったが、小楠の立論はそれらとは異なっている。スエズ運河の開鑿を称え、アメリカの共和政体に共鳴するまでの（朱子学の）「理」の大胆な読み替えがあつて、その「理」の思想が、単純な国益の追求以上の、長く広い視野において発揮されるべき国益を捉えたのである。^D

（問題作成の都合上、原文の一部を省略した。）

（注） ○江川坦庵Ⅱ一八〇一〜一八五五。江戸後期の砲術家。西洋砲術を教授した。 ○佐藤一斎Ⅱ一七七二〜一八五九。江戸後期の儒学者。 ○公武合体Ⅱ幕末、従来の幕府独裁政治を修正し、天皇と幕府とを一体化させることで幕藩体制を再編強化しようとした政治路線。 ○攘夷Ⅱ幕末に台頭した、外交・通商に反対し、外国人を排除しようという主張。 ○匹夫Ⅱ身分のいやしい男。また、道理に暗い男。 ○五世界Ⅱ五大洲（アジア州・アフリカ州・ヨーロッパ州・アメリカ州・オセアニア州）、すなわち世界全体をいう。 ○朱子学Ⅱ朱熹（一一三〇〜一二〇〇）が大成した儒学の体系。朱子は朱熹の敬称。 ○格物窮理Ⅱ事物に本来そなわる理（道理・法則）に窮め至ること。 ○兵略Ⅱ戦争上のはかりごと。戦略。軍略。 ○復然Ⅱはるかにとおいさま。 ○下学して上達するⅡ基礎を学ぶことから始め、次第に高度なものに進む。 ○義に安んじ、險に処ること夷のごときⅡ正義を踏み外さず、危機に際しても坦々としている。「夷」はたいら。平坦。 ○兼該Ⅱ（「該」は備わる意）かね備わること。 ○経世家Ⅱ江戸時代に「経世済民」（世の中を治め、人民の苦しみを救うこと）の具体策を論じた知識人のこと。 ○李退溪Ⅱ一五〇一〜一五七〇。朝鮮李朝の代表的朱子学者。日本の儒学にも大きな影響を及ぼした。 ○聖人Ⅱ知徳が最もすぐれ、万人が仰ぎ崇拜する人。 ○惨怛Ⅱ心を痛め悲しむさま。 ○宇内Ⅱ天がおおう限りの地全部。天下。世界。 ○外夷Ⅱ外国人をいやしめていう語。 ○春台Ⅱ太宰春台（一六八〇〜一七四七）。江戸中期の儒学者。

問一 傍線部ア〜オのカタカナを漢字に直せ（楷書でていねいに書くこと）。

問二 傍線部A「西洋はなぜ知識や技術において進歩したのか」という問いかけを通して、象山は何を見いだしたのか。その内容にあたる三五字以上四〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）の部分を本文中からそのまま抜き出して答えよ。

問題用紙（国語）

問三

① 本文中の訓読に従い、波線部 a の白文に返り点・送りがなを付けよ（送りがなはカタカナで記せ）。なお、再読文字「未」の読みと送りがなは出題者により付けてある。

② 波線部 b「免れ」、c「がたき」、d「なる」の文法的説明として、次表の空欄 1～7 に入れるのに最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つずつ選び、記号で答えよ（同じ選択肢を何度用いてもよい）。

語	品詞	活用形	意味
免れ	1	2	
がたき	3	4	
なる	5	6	
			7

〈品詞〉ア 名詞 イ 動詞 ウ 形容詞 エ 形容動詞 オ 副詞 カ 連体詞

キ 接続詞 ク 感動詞 ケ 助動詞 コ 助詞

〈活用形〉サ 未然形 シ 連用形 ス 終止形 セ 連体形 ソ 已然形 タ 命令形

〈意味〉チ 自発 ツ 打消 テ 推量 ト 受身 ナ 尊敬

ニ 完了 ヌ 断定 ネ 伝聞 ノ 使役 ハ 可能

③ 波線部 e を口語訳せよ。ただし、「有道」は「有道の国」、「無道」は「無道の国」と答えればよく、口語訳は不要。

問四 傍線部 B「己に思うの誠なければ」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の 1～5 の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 嘘偽りのない自分の考えを持つとしなければ、ということ。
- 2 学問をする自分の将来を本気で考えようとしなければ、ということ。
- 3 自分の考えを曲げずに主張するつもりがなければ、ということ。
- 4 物事を真面目に考えるという態度が自分になければ、ということ。
- 5 自分自身が真剣に考えるということをしなければ、ということ。

問五 傍線部 C「それ以上のもの」とは西洋の何か。本文中から漢字二字の語句を抜き出して答えよ。

問題用紙（国語）

問六 傍線部D「その『理』」の思想が、単純な国益の追求以上の、長く広い視野において発揮されるべき国益を捉えた」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 江戸時代後期に多様に展開した経世論や国家論の中で、小楠の立論は、朱子学の「理」の考え方に基づくことによって独自の位置を占めることになったということ。
- 2 朱子学の「理」の考え方は、自分たちの利害得失だけで物事を見ずに、国家を危機に陥れることのない安定した国益のあり方を小楠に気づかせたということ。
- 3 小楠が国益の追求を自己目的とするのではなく、各国に共通の利益を原理的に問い直すことができたのは、朱子学の「理」の考え方によっていたからだということ。
- 4 朱子学の「理」の考え方が、小楠に国際関係のあり方を原理的に問い直させ、国家を超える価値にそくして国益を考えることを可能にしたということ。
- 5 「天地公共の実理」に支えられていない国益の追求が結果として世界の国々からの信頼を失わせるということとは、朱子学の「理」の考え方にもともと含まれていたということ。

（以下 余 白 ）